これはぞんびですか？～はい、二次創作です～

日向 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
これはぞんびですか？～はい、二次創作です～

【Ｎコード】
Ｎ２５８１Ｚ

【作者名】
日向　剛

【あらすじ】
木村心一先生の『これはゾンビですか？』の作品の二次創作物です。著者の日向剛の視点から原作を読み取り、こんなシチュも見てみたい、という願望を表したものです。どうか、肩の力を抜いて、適当に読んでください。原作との相違が間違いなく出ると思うので…
※日向剛のオリジナル作品『∞ＣＨＡＯＳ』のキャラも参戦予定。
こいつらは完全オリジナルの為、あまり気にしないで下さい笑い

～はい、説明書です～

「こんにちは、相川歩です。このお話は木村心一先生の『これはゾンビですか？』の二次創作の話です。話の辻褄等が合わないかも知れませんが、ご了承ください。…後、俺、ゾンビっす。それと…魔装少女っす」

「アユム～、誰と話してんの？」

俺が読者の人達に話してる最中にアホ毛とちっこいのが特徴の魔装少女、ハルナが声をかけてきた

「この二次創作物を読んでくれる人にだよ」

「ふ～ん。ま、ハルナちゃんの魅力は木村先生にしか伝えらんないから、しゃーなしだな！」

…言ってる意味が分からないが、ご機嫌なのでよしとしようか

『歩。次は、私』

俺の隣でメモ帳を見せてくるのが西洋のガントレットにプレートアーマーを身に付けた銀髪の少女、ユークリウッド・ヘルサイズ。冥界から来て、俺をゾンビとして蘇らせてくれた人だ。常にこの服装の理由は自分の魔力を抑える為で…

『歩、それは、オリジナルの作品で語ってもらえればいい』

…さいですか

「さて、他にも色んな奴等が居るが、それも追々出てくるから、その時にでも紹介するので、そんな感じでお願いします」

「んじゃ、二次創作だっけ？の『これぞん』始まりだかんなっ！ハルナちゃんの活躍、期待しろよなっ！」

『あまり、期待はしたら駄目』

～おう、別小説（いせかい）から来たぜ！～

「…今日は一段と太陽が敵だなぁ…こんな日は建物中に居たいんだが…」
「おいバユムッ！そんな所でだらだらしてないで手伝えよな！」
「…ハルナ、俺はゾンビだ。この天気の中そっちに行ったら干からびちまう」
「ったく、しゃーなしだな！葉っぱの人、それに根暗マンサーにユキノリ！手伝えよな！アユムがこっちこれないってゆーから、影に移すんだ！」
…こんにちは、相川歩です。今俺たちは外で焼き肉をやってます。
…なんでかって？いやぁ、最近福引きに行ったら三等の景品が『高級カルビ五人前』が当たって、今日五人で食べるって話になったんだ。その五人は誰かと言うと…
「よし、動かせた！おいバユム！ここなら食えるな！」
先陣切って色々やってるアホ毛が目立つ小さい子が天才魔装少女で居候、ハルナ。実際焼き肉をやると言い出したのもハルナだ
「歩の為に何かをすると言うこと自体気持ち悪いのですが…ヘルサイズ殿がやるなら仕方ありません」
次はポニーテールに束ねた長い髪に、とても大きい胸が主張するだけ主張してるナイスバディガール、セラフィム。基本的に彼女も居候ではあるが時々吸血忍者の里に帰ってる。…それにしても、やはり嫌われてるなぁ俺
「んなこと言うなよセラフィム～。相川はいい奴なんだからよぉ～」
「メイルにとってはでしょうが、私に取っては気持ち悪さしかありません」
「むぅ～」
セラの隣で話してる隠れ巨乳は同じ吸血忍者のメイルシュトローム。とてもボーイッシュで里以外では基本吉田友紀と言う名前なのだが

周りから『トモノリ』と呼ばれてたりする
『歩、早く焼く。お腹空いた』
「うぅ～、ユー、お腹空いちゃったぁ。早く焼いて??」
そして西洋のガントレットとプレートアーマーを装着した美少女が冥界のネクロマンサー、ユークリウッド・ヘルサイズ。彼女も俺を蘇らせた後、家に居候してきている。こんな美少女に囲まれながら生活するなんて事、少し前までは考えなかったなぁ…
『歩?』
「…あぁ、悪い。今焼くからな」
そして一家（＋トモノリ）の五人で焼き肉を食べ、片付けをしていた時だった
「アユム!メガロだ!」
「何?」
ハルナがアホ毛をピンと立たせ、俺を呼ぶ。…そのアホ毛はレーダーか
「ここから距離はどれくらいある?」
「多分町中だ!メガロめ、アタシの町を壊しちゃただじゃ済まさないかんな!」
いや、お前の町じゃないだろ
「…分かった。悪いが皆、片付けを任せた。セラ、皆を頼む」
「分かりました」
俺はセラに片付けと皆を任せ、町中へ向かう

「…これは、なんだ?」
歩が来た場所には既に倒れたメガロが一匹いただけだった。だがどうも変だった。本来メガロは倒されると消えるはずだったのだ
「アユムーっ!」
そこにチェーンソーを持ったハルナも来たか、ハルナも倒れているメガロを見て目を丸くしている
「こいつはA級メガロ『ゴリラン』だ!こいつをこんなにするなん

て、アユムもやるな！？」
「いや、俺が来たときにはもうこの状態だった。むしろ変じゃないか？メガロって確か倒したら光になって消えるんじゃ無かったか？」
「そうだな！じゃあなんで…？天才でも分からないぞ！？」
ハルナがアホ毛を（？）にさせて悩んでいた。正直俺も分からない。俺以外にこの町で戦えるような奴と言えば、セラの上司の吸血忍者、サラス。冥界人間のネネさん。後は今は投獄されてる筈の京子。それに俺の担任のお酒を飲まないときはおっさんのクリス。だがそいつらの姿が見えないと言うことは…誰だ？
「…よっこらせっと！」
下から不意に声がしたかと思うと、メガロの中から人が現れた。メガロはそのまま光となって消えた。どうやら瀕死だったらしい
「やい！そこのバンダナ！お前誰だ！？」
ハルナがいきなり啖呵を切り出した。おいおい、仲間かも知れないのに…
「…誰だっていいだろ」
はい、俺の考えが間違えてた。こいつ感じ悪い
「なぁ？随分冷たいようだが、君が誰だか俺は知りたい。…あ、俺は相川歩。この町の人間だ。そしてこいつがハルナ。ヴィリエってとこの天才魔装少女だ」
「そうだ！この天才にその態度はおかしいぞ！」
ふんぞり返るハルナ。いや、お前が今ふんぞり返るところじゃないだろ
だが相手のバンダナが特徴の男は表情を緩めない。それどころかさっき納めた刀をまた抜いてしまった
「…一介の民間人が、何故わざわざこんな所に来る？それにその女も魔装少女…だったか？そんな感じなのか？」
ん？なんか今一瞬フランクにならなかったか？
「だったらその証拠を見せてやる！びびんなよ！」
そしてハルナはチェーンソーを持ち、呪文を唱える！

「ノボブヨ、オシ、ハシタワ、グンミーチャ、デー、リブラ！」
そしてハルナは魔装少女に変身した。相手の男は口を緩めていた。
…笑ってる？
「俺の世界でも、似たような事が出来るぜ？”変転詞、焔”！！」
すると相手の男は炎に包まれると、目が赤く変わる。刀には炎がまとわり、ゾンビの俺には非常に迷惑だった
「…ハルナ！もうやめろ！」
俺はハルナを制止する。そりゃそうだろ！？ハルナが相手を本気にさせたんだから、俺がやるしか…
「なんだ、それも魔装錬機なのか？」
ハルナ食いついたーっ！？いや、でも相手は…
「…だが、こっちの能力もなかなかいいもんだな」
えー、相手もハルナに食いついちゃったよ…なんだよこの展開…
そして少し話をしたのち…
「あぁ、それじゃあこれはこの世界の魔力なのか」
「そうだ！それを天才は具現化してるんだ！すごいだろ！敬えよな！」
…仲良くなっちゃった
「あ、あの～…」
「ん、お前…ハルナ曰く、ゾンビだな？」
「は、はい…」
「すまないな、俺もこっちに来てから日は浅いが、なんか無闇に敵を叩いてた気がする」
そして相手が握手を求めて来たので、とりあえずは握手を返す。すると相手は俺に身体を預けてきた。そいつの胸からは血が滲んでいた
「っ！？お前…っ！？」
「…もらいすぎた…みたいだ…ちょっと…あまく見てた…」
「ハルナっ！」
「なんだよバユムッ！」
「こいつを運ぶぞ！手伝え！」

「…しゃーなしだな！アユムを手伝ってやる！」
そして俺とハルナはこの男を家に運んで行く

「…」
「セラ、どうだ？」
「いちいち話しかけないで下さい、気持ち悪い」
「相変わらす手厳しいな…。いや、とりあえず教えてくれ？」
家について、セラやユーたちにも手伝ってもらって男を今は寝かせてる。とりあえず交代で容態を看ると言うことで、今はセラが看ていた
「…正直、これ程の傷はそうそう生易しい戦闘ではつきません。この傷は本当にメガロがやったのですか？」
「それは正直俺にも分からない。メガロの下から現れたくらいだからな」
「…それにこの男、普通ではない」
「…あぁ」
あの場に居なかったセラが普通じゃないとすぐわかるって事は…吸血忍者か冥界人か？
「ですが、吸血忍者では無いでしょう」
さも当たり前のように否定するセラ。俺はそれを何故か訪ねる
「なんでだ？こいつも刀を…」
「彼は何かの物質を刀に変えてるわけではない、本物の刀に力を集めている…それは吸血忍者の里には伝わってない力です」
「…だとすると、他の二人にも聞くか」
まず一人目…ハルナ。あいつは部屋に居た
「おいハルナ、ちょっといいか？」
「…」
ハルナは何か考えてるようだ。…心当たりがあるのか？
「あの男…知ってるか？」
「んや、知らない。知らないけど…ん～」

ハルナはアホ毛が？になっている。ただ、何か心当たりはありそうだな
「よしハルナ、何か分かったら教えてくれ」
「ん！」
そして…ユー。
あの力は特殊。もしかしたらユーにもあんな事が出来るんじゃないか？と思い聞いてみる
「なぁユー、あいつは冥界人か？」
『わからない』
無表情のままに見せるが、どうやらユーも真剣に心当たりを探しているようだ。そうこうしていると、部屋からセラが出てくる
「ヘルサイズ殿、変わっていただけますか？」
『合点』
…なんでそんな言葉をあえてチョイスしたんだよ、ユー。と、セラはそのまま家を出る準備をしだした
「どこ行くんだ？」
「吸血忍者の里へ。もしくは頭領が知ってるかもしれませんからね」
セラも随分興味を示してるな…何でだ？
「あぁ、じゃあ情報収集頼むな？」
「分かりました。…行ってきます」「はいよ」
そしてセラを送り出した直後、入れ替わる様に女の子が現れる
「あ～いかわ！」
「トモノリか、どうした？」
先程一緒に居た友紀が家に遊びに来た。先程と同様黒のタンクトップに短パン。…随分とアグレッシブですこと、胸とか
「師匠から聞いたぜ？なんか男が倒れてたんだって？」
「ん？あ、あぁ」
ハルナが友紀に聞いた…何でだ？普通ならハルナは大先生に聞けばいいのに
「んでさ、料理作れば目覚めたときにすぐ打ち解けられるだろうっ

て、オレを誘ってくれたんだ！師匠はいい奴だよな！」
…ふ～ん、ハルナ、近い人間が現れたからなんとか知りたいんだ、そして友達になりたいんだな。俺はこのときあの男に少し嫉妬していた。皆があの男にばかり関心を示していたが、理由はそれか…。なら嫉妬しても仕方ないか
「あぁ、いい奴だ。なんてったって天才だからな！」
「まぁ、相川もめっちゃいい奴だけどな！」
「俺？俺は大したことはしてねぇよ」
「でも見ず知らずの人間を家に入れて看病してやるって、中々出来ないぞ！俺、相川に惚れ直すぜ！」
…そういえばそうだな。あのときは無我夢中だったが、何故か親近感が持てる奴だったな。…あいつもゾンビだとか？まさかな
「とりあえず、そういう事ならハルナに会って料理を作ってくれ」
「おう！じゃ、お邪魔しまーす！」
「お、ユキノリ来たか！早速やるぞユキノリ！」
「はい、師匠！」
楽しそうに台所に駆けてくハルナと友紀。それがとてもほほえましかった

「今日の晩御飯は『豚キムチチャーハン』だ！どうだ！天才とユキノリにかかればこんなの楽勝だ！」
ハルナが食卓に豚キムチチャーハンが入ったフライパンを持って来て、皆のさらに盛り付ける。今日の食卓は五人で囲むことになった。友紀が居るのは久しぶりだが、まぁ今さら一人や二人増えても変わらないな。
俺の隣でセラが少し厳しい顔をしている。セラが里から帰ってきてから一言も話さず、ずっとこの調子だ。…ここは、少し肩の荷を下ろさせなきゃな
「なぁセラ」
「…」

話しかけてもいつものように罵倒してこない。随分余裕がない…セラらしくないな
「飯、ちゃんと食って元気出せよ？今日はハルナと友紀の自信作なんだから、ちゃんと味合わなきゃ…」
「歩」
セラが口を開いた。セラは少し悲しそうな雰囲気だ
「…彼は、私達吸血忍者…いや、ヴィリエや冥界にとっても影響を与えるモノの様です」
「…どういう事だ？」
ハルナと友紀はじゃれあいながらご飯を食べてる。あの様子じゃこっちの会話は聞いてないだろう。ユーももくもくご飯を食べてるが、メモ紙に『続けて』と書いてあったから、ユーは話を聞いている。…影響、か。まるでユーの心が動くと人生が変わるみたいな感じなのだろうか？
色々考えてる間、セラは話を続ける
「彼はどうやら私達の世界には居ない存在…いや、居てはならない存在。イレギュラー…。故に、戦力として欲しくなる。あのメガロとの戦いを里の者が見たようです。圧倒的な炎をあやつりメガロを死至らしめた、と」
「でも、俺が来たときはまだメガロは消えて…」
「歩が来る直前。メガロの足掻きを受けた彼はメガロの下敷きになったが、そのままメガロは死んだ。という過程でしょう。ただ、とにかく言えるのは非常に強かった、と言うこと」
「…それで、頭領は？」
吸血忍者の頭領は俺も面識がある。ヴィリエの女王の呪いでブロックワードに触れると瀕死になる呪いをかけられたおっさん。だがあの人はあまり戦いを好んでるようには見えないから、あいつを捕獲とかは言わない…
「彼を消せ、という指令が下りました」
「消す…！？セラ、それは本気か！？」

あの頭領らしくない指令だ。どういうことだ？セラはその理由を気分が悪いように話した
「今の内に叩かねば、我らを滅ぼしに来るかも知れないから、だそうです」
「あいつが吸血忍者を襲うとは思えないんだが？」
「だが、襲わないと断定も出来ないでしょう？」
「む…」
そういわれると返せない。確かに強大な力がどの勢力にもついていないなら、仲間に率いれるか、消すかの2択だ。そして、強大な力は時に自分自身を滅ぼす。そうなりたくないから頭領は消す結論に至ったって事か、全く家族思いなおっさんだな
「だけどあいつも生きてる。まずは起きて話を聞いてから動くじゃダメなのか？」
『死は、つらい。例え敵でも』
ユーがメモを見せる。ユーは冥界人だから死の重みを人一倍知ってるのだ。だとするとセラを止めたいんだな…。セラはユーのメモを見た後、目が泳いでいた
「セラ、無理はするな。無理な命令にまで手を貸す必要はない。…とにかく待て、セラ」
「…分かりました」
セラはあっさり引いた。最近セラは少しものわかりがよくなった気がする
「じゃ、アタシがあっちのバンダナにご飯持ってくから、アユム片付け頼む！」
ハルナはそういい皿に豚キムチチャーハンを乗せ、あの男が居る部屋へ向かう。すると友紀が不安そうな目で俺を見てるのに気付いた
「どした？トモノリ」
「相川、その男…本当に大丈夫なのか？いきなり襲ってこないのか？」
友紀も途中から話を聞いていたらしい。俺は笑って返す

「あぁ、あくまで直感だが、悪い奴っぽくは無い」
「相川が言うなら大丈夫なんだろうけど…」
するとドアが勢いよく開き、ハルナが出てくる。…どうかしたのか？
「アユム！大変だ、バンダナが居なくなった！」
「！？何！？」

あいつ…何してんだ！？あの傷じゃ起き上がるのでもつらいだろうに！
「皆！悪いけどここに居てくれ！俺が行く！」
俺は無我夢中で外に飛び出した。何か、胸騒ぎがする…

「…寂れた町だな」
バンダナを巻いた男が呟く。傷が痛むのか常に苦しそうな顔をしている。そこに歩がやってきた。歩は息を切らせなら男に詰め寄る
「おぃ、お前っ！」
「…そういえば名がまだだったな。俺の名前は烈火瑠奈。世間体は普通の高校生さ」
瑠奈は口を緩めながら語る。だが歩はそのまま瑠奈の胸ぐらを掴む
「お前なぁ！今の自分の状態見て分かるだろ！？無理できないって！」
「…相川歩と言ったか？」
瑠奈の目付きが変わる。おいおいまさかやる気じゃ…
「あれは、敵だな？」
「…何？」
歩が瑠奈の胸ぐらを離し、刺された方を向くと…そこには魔装少女に変身した京子が笑顔を向けていた
「…っ！」
「相川さん、会いたかったですよ♪」
「…俺はお前とは今、会いたくない。京子…何で脱獄してる？」
「脱獄なんて人聞きの悪い…仮釈放ですよ？だからその間に因縁を

晴らそうと思って♪」
京子の目は既にヤル気満々だった。…くそ、やるしかないのかよ
「相川歩、ここは俺が引き受ける」
「！！？」
「あら…貴方は、どちら様？私の邪魔をすると…ぶっ殺しますよ？」
京子が衝撃波を放つ。それは瑠奈に直撃のルートだった
「危ねぇっ！！」
「”闇吸門”」
うわぁ、厨二病みたいな名前唱えて京子の技を無効化しちゃったー
…おいおい、ありかよそんなの。こいつ何者だよ！
「…悪くない」
「あら、変な邪魔が入りましたねえ…なら、貴方から殺します！」
京子は火球を生み出し瑠奈に飛ばしてる。まずい、このままじゃ直撃…
「相川。俺は、普通じゃない。…それをもう一度見せてやる」
瑠奈は京子が生み出した火球を全て切り払った。…そんなのありかよ！？
「あれを切り払うって…そんなのありかよ」
「あり得るんだな、これが。俺は炎、闇の二重能力者だ。覚えておけ！”崩壊花火・砕”！」
瑠奈は炎をまとわせた剣で地面を叩き割った。そして周りは煙におおわれ、京子は俺たちを見失ったようだ。
「くっ…汚い真似を！」
「相川。ここは退くぞ」
「え？」
「俺は女は斬れない。それに、お前にとっては因縁だろ？…顔に出てるさ」
「まぁ、そんな大袈裟なことでは無いさ。だけど町中では確かにやりあいたくはないな…仕方ない、あそこにむかうか…」

「む、あそことは？」
瑠奈が首をかしげる。まぁ無理もないさ。あそこは普通は選ばれないからな
そして俺は瑠奈を引き連れ墓地へ向かう。瑠奈はこの地に入ってから、随分口をつりあげてる。…気に入ってくれたなら何よりだ
「墓地か…闇の力を感じるぜ…」
…厨二だぁぁ…
そうこうしてるうちに、京子が追い付いてきた。胸元が少しはだけてる。…暑いのか？
「相川さん…やはり殺され願望でもあるんですか？」
「いや、俺はゾンビだからな。もう死んでるぜ？」
「ふふ…それもそうですね？だったらもっと死んでください…形が無くなるくらいにっ！！」
京子が火の玉を飛ばしてくる。それを瑠奈が俺の前に楯になるように立ち防いでくれた。…おいおい、さっきまで倒れてた人間なのかよ
「…行け、相川。火の玉は慌てなければ避けられる。僅かな熱を感じろ」
「んな無茶な…」「俺がこいつを斬り伏せても、こいつはまた起き上がりお前を狙う。なら、歯向かえないように分からせてやれよ、相川」
「アユムーっ！！」
そこにまたハルナがやってきた。手にはチェーンソーが持たれてる。ナイスだ！
「ハルナ！ミストルティンを借りるぞ！」
「おう！ぶっとばしてやれ、アユム！」
ハルナから受け取り魔装少女に変身する。よし、これで戦える
「小癪な…消えろっ！」
そんなハルナに衝撃波を放つ京子。だがその攻撃も瑠奈がハルナをかばい防ぐ

「やれ！相川ぁっ！」
「やっちゃえアユムーっ！」
「おおおぉっ！」
「っつ！」
その隙をつき俺はチェーンソーで京子に斬りかかる。京子はそれをもろに食らった。身体からは大量の血を吹き倒れる…が、そのまま京子は光に包まれ消えた。その様子はまるでメガロだった
「…京子は魔装少女のはず…」
「アユム、終わったなら帰るぞ！アタシはお腹空いた！」
「…だとよ」
だがハルナは瑠奈に向き直り
「アンタも一緒に来るんだかんな！バユムを助けてもらったお礼だ！」
ハルナはどうやらこの男を気に入ったらしい。…ハルナはもう一人じゃない、よかったな
「ほら行くぞアユム！バンダナもだ！」
「…ほら行くぞ、君？」
俺は瑠奈に手招きをする。瑠奈は仕方ない、と行った顔でついてきた。…あの京子が消えた謎が、これからの話に関わるとは…

～『はい、彼は私と似てる』～

…あ～、こんにちわ。相川歩です。前日にメガロを倒す際、烈火と言う男が現れた。その男とあった直後に京子に似せたメガロが現れた。さて、これから何が起こるんだろうな…

『歩、誰と話を？』

「あぁ、ちょっと…ね」

『そう』

ユーはそう書き、すぐ目をテレビに戻す。今日はユーが毎週見てるバラエティ番組の日だ。感情を動かしちゃいけないんだけど、やっぱり楽しいんだろうな

「…歩、気持ち悪いです」

「…セラ、いきなり気持ち悪いは酷いだろ？」

横に座ってるのはセラだ。随分機嫌が良さそうにも見えるが、やはり言葉は突き刺さる

「…それにしても、あの男…」

「烈火…の事か？」

やはりセラも未だに引っ掛かってるらしい。どうやら吸血忍者には良くない人間みたいだしな

「大丈夫だ、あいつはいきなり吸血忍者を殺したりはしないさ」

「歩、何を根拠に言ってるんですか？」

「だってさ、ハルナが気に入った奴に、悪い奴が居ると思うか？」

あれからハルナと烈火は仲が良い。共にいきなり分からない土地に来たもの同士、気が合うのかも知れない。ちなみに今もハルナは烈火に貸してる部屋に居る筈だ

「ハルナはその男に丸め込まれてるだけではありませんか？ハルナを疑うつもりはありませんが、あの男はやはり信頼に足る人間だとは私は思えない」

セラは厳しい表情でそう答える。…う～ん、セラと烈火はやはり仲

良く出来ないのか？
するとユーが机を叩き、メモを見せてくる
『歩、ちょっと』
「…ん？ユー、どうした？」
ユーがその場から離れる。それに俺はついていく。…いったい何だ？

『歩』
ユーが来た場所、ここは墓地だった。…ここなら確かに他人は来ないな
「どうした？ユー」
どうもユーの様子が変だ。急になんでこんな所に呼び出したんだ？
『烈火について』
…烈火？もしかしてユー、何か分かったのか？
「何か分かったのか？ユー」
『いや、分からない。だけど、彼がこっちに来たのは私のせいかも知れない』
「…何でユーのせいなんだ？感情が動けば未来が変わるっていってたけど…ユーの知らない人間の未来まで変わるのか？」
『分からない。私の力が彼に作用したかもしれない』
ユーが少し申し訳なさそうな顔をしていた。…あり得ない話では無いけど…
「とにかく、一回烈火君と話す必要あるのか？」
『私と話をさせて欲しい』
「ユーが？」
『歩に仲介をたのみたい』
ユーが珍しく俺に頼み事をしてきた。…よし、一肌脱ぐか
「分かった！！だったらいつにする？」

『今度私が指定する』
そして、その場の二人の話し合いが終わった。そしていえに帰ると…

「アユムーっ！！」
出迎えにハルナが来た。随分ご機嫌だな
「ただいま、ハルナ」
「アユム！やっぱあいつはすげー！ヴィリエにはあんな奴はいないな！アタシの次に天才だ！」
なんか言ってる意味がイマイチ分からない。何をやってたんだ？
「あいつ、なにも無いところから火を出したり出来るんだ！すげーよな！」
メガロと戦っていたときに出した炎の事か。…今回、それが問題なんだよな
「ハルナ、烈火はどこに居る？」
「ルナか！？」
…瑠奈？あぁ、彼の名前だったな。めっちゃ仲良くなったんだな
「ルナなら今墓地に行くって言ってた！」
…墓地？
『歩、私と行く』
「ユー…分かった。ハルナ、セラと留守番頼むな？」
「ん？アユム、またどっか行くのか？」
少し不満そうな顔を見せるハルナ、だが俺達を止める事はしなかった。俺とユーは墓地に戻る…

墓地に戻ると瑠奈がそこで座っていた。遠目で見てもわかるが、何か憂いを帯びた顔をしているようだった
「ユー、何か話しかけにくくないか？」
『悲しそう』
ユーはメモにそう書いた後、俺を手で制して自ら烈火に近づいていった
『貴方は、異世界から来た、違う？』
「…」

烈火はその答えに口を閉ざしていた。…何だろう、初めて会った時のイメージと違うな…？
『私と貴方、似て非なる力を持ってる。だから私には隠せない』
「…そうらしいな」
烈火の目がユーに向く。敵意は無いが、冷たい目をしていた
「俺は…この世界の日本とは違う日本から来た。お前達から見たら異端分子に見えるんだろうな」
冷たい口調で烈火は言葉を続ける
「分かってるさ、セラフィムの心配も、ユークリウッドの危惧も…。でも、俺自身悪いが今の状況はお手上げさ」
自嘲気味に烈火が笑う。…彼も考えてるんだな
『違う、私が心配してるのは、別。貴方、無理してる』
ユーが驚く内容のメモを烈火に渡している。…何の事だ？
「…さすがは冥界人、死に精通してるな。…この世界に無い分子の力だからな。いずれはまずい事になるだろうな」
『だったら私たちの魔力を』
「ダメだな。一時的には効果はあるだろうが、お前もつらいだろ？」
そうなのだ。ユーの力は絶大ではあるが、制御がきかないのだ
「…相川」
そこで烈火は俺に話しかけてきた。…俺も話にはいって良いのか？
「なんだ、烈火君？」
「…ユーは、冥界一なんだよな？」
「…あぁ」
「…少し、ユーと少し戦ってもいいか？」
「え？…なんでだ？」
俺は言葉の意図が見えない。出来ればユーにはそんな事をして欲しくはない
「…ユークリウッドには分かってる筈だ。俺がこの世界に必要か、どうかが…な」
その言葉を聞き機、ユーを見ると…ユーも無表情ながらやる気十分

だった
「…ユー？」
『大丈夫、殺しはしない』
…仕方ないか
「分かった。その代わり危なかったら止めるからな？」
「あぁ」
『うん』
そして烈火とユーが武器を構える。…そして一気に双方の武器が交わる…って、嘘だろ！？今見えなかったぞ！？化け物か…？
「斬るっ！！」
烈火が間合いを詰め、刀を振り抜くとユーはそれを鎌で受ける。そしてユーは鎌で瑠奈を狩りにかかるが烈火はそれをかわす…その一つ一つがあまりにも常識はずれだった
「…嘘だろ…こんな…」
だが、その芸術的な戦いに水を注そうとするのが、一人
「あらぁ…隙だらけなネクロマンサー♪」
京子だ。既に光弾の発射準備が整っている
「京子か！やめろ！」
「相川さんの頼みでも聞けません。私はネクロマンサーの魔力をてに入れるのですから！」
そして光弾が発射される。狙いは、ユーだった
『っ！？』
ユーが気付いたときにはもう回避出来ないレベルだった。だが…
「ぐあああっ！！」
被弾したのは、烈火だった。派手な血飛沫をあげ、その場に崩れる。
…あいつ、ユーをかばったのか！？
『！？』
ユーも驚きを隠さない。烈火もユーと同様に戦いに集中してた筈、気付いてるとは思えなかった。そしてショックを受けてるのが、一人
「ルナ！！ルナーっ！！」

ハルナだ。どうやら知らぬ間にこの場の戦いを見てたらしい。慌てて烈火の所にかけよる
「ルナ！大丈夫か！なぁ！？」
ハルナが動揺している。それを嘲笑うかのように京子がたたずんでいた。ユーの傍まで俺は歩き、京子に聞く
「…お前…」
「残念ながら外しちゃいましたね…彼からじゃ魔力は手に入らないのに…」
「やっていいことと悪いことの区別位つくだろ！何をやってるんだよ！」
烈火はハルナの呼び掛けに反応しない。流血が酷く、このままでは危険だった
「私に構ってる暇はあるんですか？彼、死んじゃいますよ？」
だがここでユーが前に出る。怒っていた
「あら、ネクロマンサー、どうかしましたか？私を殺す気ですか？そんな暇があるなら彼を…」
『人の命で、軽々しく遊ぶな』
この言葉が、とても重く感じた。ユーが、怒っている。他人の為に、だ
「ユーの言う通りだ。お前のやった事は人殺しだ…許されない」
「だから…相川さん？」
だが、ここで…

「黙れよな！！そして、早く消えろ！！」

この言葉で周りがしずまった。発したのは…ハルナだった
「ハルナ…」
「早く消えろって言ってんだ！！」
「あら…落ちこぼれの魔装少女が、吠えてますね？」

「お前が居ると、気分が悪い！消えろよな！」
だがハルナは仕掛けるそぶりは見せない。京子はそれにため息をつき、離れていく
「…仕方ありません、今ネクロマンサーを殺すのは不可能でしょうから、ここはひきましょう。だが、次は覚悟してくださいね？」
そして京子が消える。どうやら今回は機を逃した、と見たようだ。だが誰もそれを気にしはしない。何故なら…
「げほっ！」
「ルナ！大丈夫か！？」
ハルナのダチの烈火が…重傷だからだ

あれから俺達は烈火をいえまで運んだ。運良く夜だったから人目につかなかったのが幸いだ。家に着くとセラに会ったが「…そうですか」と一言だけだった。どうやら理解はしてるようだった。そして烈火を横にすると、ハルナは「ふたりにしてくれよな！」といい、俺とユーを閉め出した。閉じ籠る間際、ハルナは泣いていた気がする…
『歩、彼はいい人』
唐突にユーがこのようなメモを見せてきた。…刃を交えた人に分かる物かあるのか？
『彼を、しばらく家で守りたい、ダメ？』
ユーがまた頼み事をしてきた。…なら仕方ない
「あぁ、分かったよユー」『ありがとう』
ユーがそのメモを置くと、テレビに視点を移した。それと同時にセラが話しかけてくる
「歩、ヘルサイズ殿はやはり…」
「あぁ、彼を守るつもりらしいぞ？そっちはどうなんだ、セラ？」
「頭領は以前のような関心は見せてはいませんが…やはり指令は変わりません。彼を殺せ、です」
「…それに従う気は？」

「私は紛いなりにも吸血忍者です。頭領の指示に従わないわけには…」
「違う、俺はセラの意見が聞きたいんだ」
「…」
セラは諦めたようにため息を一息つき、話出す
「私は、彼を生かすべきかと。ヘルサイズ殿の意見もごもっともですが…あくまで私の勘ですが、彼を生かせば何か危険を回避できるのではないか、と」
「ふ～ん…」
「第一、ハルナがあの調子では、殺すのは難しいでしょう」
やはりセラもハルナの事を気にしてくれていた。やはりセラも家族なんだな
「そうだな、ハルナがあれだけ気に入った人間なんだ。それを攻撃しようかと思えばハルナはなんとしてでも止めるだろうな」
「ふふ…ハルナらしいですね。歩、ハルナの様子を見に行ってあげたらどうです？ハルナはあれからご飯も食べてないでしょうから、お腹も空いてましょう」
そういいセラは俺を烈火の部屋へ向かわせた。手元にはハルナと烈火のラーメンだ。それを持ちながら、部屋をノックする
「ハルナー？居るかー？」
「…アユムか？」
部屋からは小さな声が聞こえてくる。ハルナ、眠そうだな
「晩飯を持ってきたけど…はいっていいか？」
「…いいよ」
そういい、ハルナの部屋に入る。布団には烈火が寝ていて、その横にハルナが座っている。烈火はあれから目を一度も覚ましてないようだ
「…今日はラーメンか？」
「おう。あまり時間が無くてな…不満か？」
「いや、いい」

そういいハルナはラーメンを食べ始める。やはりお腹減ってたか
「…アユム、こいつ、死んじゃうのかな」
ハルナがぽつりと洩らした一言。この言葉の意味を歩は知っていた
「…いや、こいつは絶対目を覚ますさ」
「やっぱり、アタシと関わると、皆こうなるのかな…」
いつもの様な元気は無い、箸を持つ手が震えている
「…コイツも、友達になれると思ってたのに…」
ハルナの目から涙が溢れていた
「ハルナ、お前が諦めちゃダメだ。こいつは必ずまた目を覚ます。間違いなくな」
「…アユム、何でそんなに自信ありげなんだ？」
「なんとなく、かな。ユーがなんか自分と似てるって言ってたし、普通じゃないんだろうから、簡単に死にはしないさ」
「…根暗マンサーと似てる？」
「ユーはそんな感じがするらしいぞ？それに…ハルナと同じく、セラもユーも、俺も皆、コイツには目を覚まして欲しいんだ。これだけの想いがあるのに、死んだら薄情だ」
「…そーかもな！天才のハルナちゃんがこれだけ心配してるんだ、覚まさなかったら殺すかんなっ！」
とんでもない無茶を言うハルナ。でも少しは元気になったみたいだ
「じゃ、食べ終わったら器を廊下に置いといてくれ？後で取りに来るからな」
「分かった！！」
そういい部屋を後にする
…ハルナに取って、いい出会いだったみたいだな
これから、烈火が共に住むって言うのも、悪くないのかもな…
後で器を取りにいくついでに、部屋をのぞいてみると、烈火に被さって寝るハルナの姿があった。さすがに眠かったんだな
「…仕方ないな」
ハルナに毛布をかける。風邪なんか引いたら看病される側になっち

ゃうからな
そして居間に戻るとユーがお茶をすすっていた。セラの姿が無いところを見ると、寝たのかな
「ユー、寝ないのか？」
『歩、変な感覚がする』
ユーがなにかに気付いたみたいだ。ただ、ユー自身も良く分かってないみたいだけど
「ユー、じゃあ俺はどうしたらいい？」
『学校へ』
そう書き、俺の手を引くユー。いったい何が…

～…はい、お邪魔…します～

…あれから一週間が経った。京子がきた一件以来、平穏が訪れていた。だが烈火は目覚めない。ユーが見せた『無理してる』の原因がこれなのか？

「…で、あるからして、ここの主人公の気持ちは…」

俺、相川歩はあれから普通の生活を送っている。今日も何事も無く学校に来て、いま授業を受けている。

結局あの後ユーと学校へ来たんだけど、特に変わったことは無かった。ユーも首をかしげていたが、正直、収穫は無しだ

そして授業が終わると放課後、いつもの様にトモノリが…

「…あ、相川…君」

…トモノリじゃない？俺の机の近くにきたのは、おさげ髪が特徴の平松妙子だ。…何の様だ？

「どうした？平松」

「あ、あの…」

「相川、覚えてないの？」

平松の隣に現れたのは平松とは正反対のギャル、三原かなみ。今日も化粧がバッチリ決まってる

「何の事だ？」

「今日、妙ちゃんが相川ん家行くって話したじゃん！」

…俺の家に？

「え～と…」

「あの…来週、テスト…だから…勉強を…一緒にって…」

「あぁ…」

そういえば来週テストがあるから、勉強を平松に教えてくれって頼んだら、平松が俺の家でやるって言い出したんだっけか。…忘れてた

「じゃ、行くか？平松」

「う、うん…分かった…」

「妙ちゃん、ファイトだよーぅ♪」
三原がよく分からないことを言ってる。…まぁいいか

そして俺と平松はならびながら歩き、家にたどり着いた
「ここが…相川君の…家なんだ」
「あぁ、あまりキレイじゃないんだけどな、勘弁してくれ？」
「うぅん…大丈夫だよ？」
平松はいつも通りの調子でうつむきながらも、優しく笑って返してくれる。…可愛いよなぁ
「…じゃ、入るか」
そして、玄関を開けると…
「…今日は早いんだな、相川」
「…烈火！！？」
今日の朝まで目をさまさなかった烈火が玄関で仁王立ちをしていた。
…何故仁王立ち
「…？」
平松はなんだか困惑していた。そりゃそうだよなぁ
「お前、傷は…」
「傷？何の話だ」
烈火は平松に目を向け、シラを切った。…そうだ、平松にはあまり知られたくないよな
「いや、悪い」
「…あの、相川…君？この人は…？」
平松があたふたしながら俺に聞いてくる。それに烈火が素早く答える
「訳あって居候させてもらってる烈火瑠奈だ。よろしくな」
「あ、はい…平松…妙子です…」
平松が俯きながら答える。優しいけど恥ずかしがりやなのだ。その状況を長引かせるわけにはいかないな
「烈火、悪いが通してくれるか？」
「あぁ、邪魔をする気は無いからな」

そういうと烈火はすぐにその場をどけた。…なんなんだ？
「…じゃ…じゃぁ…おじゃまします…」
そして平松と共に居間に入る。…烈火もついてきているが、気にしない
とりあえず居間の机の上に教材を置き、とりあえず平松と共に勉強を始める
「…」
「…」
…会話がない。無い
「相川」
話しかけてきたのは烈火だ
「なんだ？」
「…ちょっと出掛ける。あれの場所を教えろ」
烈火が許可を求めてきた。…もっとも、あれの意味が理解できないんだが
「あれってなんだよ？お前の私物は多くなかったけど、何がなんだか…」
「…空気を読め、相川」
そして烈火は自分の腰元を叩く。それで俺には何が必要か伝わった
「あれか。あれなら玄関の傘立てにあるぞ？」
「…雑に扱われたもんだな。まぁいい…少し出掛ける。晩飯頃には帰れるよう…」
そして俺たちに背を向け、手を振りながら…小さく呟いた
「…努力する」
「あぁ、ハルナも、皆も、待ってるからな」
烈火が無言で家を出ていく。だが何やら様子が違う様な気がした…
部屋に戻り、勉強の続きを始める俺。平松はその間２ページ位早く進んでいたようだ
「…相川君」
そこでようやく平松が俺に話しかけてきた

「なんだ平松？」
「…あの…そこの答え…違うと思うな」
「え？この問８の答えか？…？じゃないのか？」
「…だって…この時は…」
次第に平松は恥ずかしがってる素振りを見せながら少しずつ俺と問題を解いていった。平松の解説は分かりやすく、予定より一時間も早く終われた
「ふわぁ…疲れたっ」
「…そうだね…相川君…頑張ってたもんね…」
俺があくびをしてると、平松が微笑みながら俺を誉める。実際平松が居なかったら二倍の時間が必要だったろうに…
「…相川君？ユーさんや…ハルナさんは達？」
平松が唐突にこんな事を聞いてきた。平松には知らぬ間にハルナやユー、セラが俺の家に住んでいることを知っていた（大方織戸のせいなんだろうがな）
「ハルナとユーは今商店街。セラは…隣町でアルバイト」
実際ハルナとユーは今商店街のおばさんの所にアルバイトに行って（ただ遊びに行ってるような物だが、おばさん達には好評らしい）、セラは今吸血忍者の里で会合らしいんだがな、素直に言う必要も無いだろ？
「…そっか…」
そう小さく呟き、平松が何やら思案顔になる。そしてなにかを決心したように俺に向き直る
「…相川君。良かったら、晩御飯つくってあげたいんだけど…いいかな…？」
「え？」
「…今日…誘ってくれて…楽しかったし、嬉しかったから…何か、私なりに恩返しがしたくて…」
「いやいや、平松にはむしろ助けられっぱなしだったし、むしろ俺がつくってごちそうするよ。時間、まだある？」

「…相川君が作ってくれる…の？」
「あぁ、腕によりを…て言うとハードルは上がっちゃうけど、そんな感じで作るさ」
「…なら…お言葉に甘えようかな…？」
そういい、すぐ引き下がる平松。…何で作るなんて言い出したんだ？
そこに慌てたそぶりのハルナが帰ってきた
「あ、アユムっ！！」
「どうしたハルナ、そんなに急いで…」
「あ、お邪魔してます…」
ハルナは挨拶した平松を無視し、俺に近寄ってくる
「少し耳かせよな」
「？なんなんだよ」
ハルナに耳を近づける。そこでハルナが小さくながら、足早に告げる
「メガロが出たんだ。それも沢山。今ルナが処理に当たってるんだけど…正直ヤバイ」
「何だって？…だからか」
二人だけの会話を不思議そうに見つめる平松。だが、この会話は知られるわけには行かないのだ
「だからってどう言うことだ、アユム」
「あいつ、俺と平松が勉強をし始めた所で刀の置場所を聞いてきたんだ。だからその場所を教えたらそれをもって…」
「…もしかして、アユムにたいしてルナなりの優しさだったのかもな？一人で戦うなんて、ハルナちゃんでも難しいのに」
「だったら俺もそこに…」
「いや」
ハルナが俺の言葉を遮る。そしてこれが大事と言わんばかりの口調で俺に伝える
「そのルナから『お前達の力は借りない』って言われたんだ」
ハルナが唇を噛んでいた。寂しいんだろうな、必要とされなくて
「そう言われたって、まずいんだろ？」

「さっき別れてこっち来る最中、葉っぱの人に会ったから葉っぱの人に行ってもらってる。だから簡単には負けないはず」
「だったら俺はそれを知りながら無視をしろって？」
「…アタシだって行きたいよ！！」
とうとうハルナが叫ぶ。その様子に平松はただ驚いていた
「ルナも友達なんだ！！居なくなって欲しくないんだ！！やっと目を覚まして、嬉しかったのに…また、寂しくなりたくないんだ！！」
「落ち着けハルナ、今は…」
「アユムっ！！」
ハルナは目に涙を浮かべながら俺に掴みかかってくる。俺も、つらかった
「ルナは、アユムとその友達の為に声をかけなかった…それで、アユムはムカつくのか！？」
「あぁムカつくよ、今は一緒に住んでる家族なんだから、黙って行かれても困るだけだ」
俺は正論を言ったつもりだったが、どうやら違った。ハルナはそのまま黙り、俯く
状況の悪化に拍車をかけるように、今度はセラが帰宅する。だがセラの服は血で腹部が赤く滲んでいた
「…歩…」
「せ、セラ！？どうしたんだその傷！」
「…彼女を、早く安全な場所へ避難を…」
セラはそれだけ言い、俺に身体を預けてくる。部屋に肩をかしながら歩き、セラに状況を聞く
「どうしたんだセラ、今烈火の所に…」
「歩は、自分の命と家族の命を、天秤にかけられますか？」
「…かけられるわけないだろ、どっちも大事だ」
「…彼は、家族の命、はたまた見知らぬ者の命を重んじたみたいです。…私も、その覚悟の重さは背負えません」
セラは少し腹部を押さえてたが傷は浅く、大事には至らないようだ

った
「彼は、歩を、そして彼女を守るつもりの様です。だけどここじゃいずれメガロが来る…だから、逃げなくてはいけないんですよ」
「待てよ。俺がその場で戦ってメガロを倒せば…」
「ハルナに言われませんでしたか？『来るな』と」
「…セラもか」
「彼は私にも退けと命令しました。勿論まだ戦えましたが…彼の覚悟に負け、今ここに居るんです。…彼の意図を汲んであげるべきと思いましてね」
「あいつの意図？」
俺は今セラが言った意図の意味が分からなかった
「どう言うことだセラ。烈火は何を考えて…」
「烈火は、歩とあの女性を見て、巻き込めないと察したのでしょう。友人を無下に帰すのは失礼に値するがゆえです」
「…だからって、理由も言わずに…」
「彼は人間関係に少々敏感なんでしょう」
セラは吐き捨てるように言う。傷が痛むのか、時々顔をしかめていた
「…今からでも、烈火を…」
「その必要性はありません。今彼の現場にはサラスバディとメイルシュトロームがいます。事足りてるでしょう」
「…そんな…」
そして噂をすれば、烈火が帰ってきた。彼の服は傷だらけだった
「…」
「烈火…」
一瞬目があったが、烈火はそのまま目をそらし、部屋に入っていった
「…」
「歩、話をしにいきなさい。こんなことをされては迷惑ですから」
「あぁ…」
セラの怒り口調に押され、俺は烈火が居るへやに向かう。するとドアが半開きだった

「…烈火…？」
恐る恐る入ると、そこは包帯で身体を巻いていた烈火がいた。包帯は血で滲み赤くなってる箇所が沢山あった
「…相川、か」
「烈火…その傷…」
「いやぁ、ド派手にやられてな。俺のうでも鈍ったもんだぜ」
烈火は明らかな作り笑いを浮かべている。俺はそれにすこし腹がたった
「…勝手に出ていって、んな事してんなよ！」
「…悪かったよ」
烈火はバツが悪そうに言う。…何で一人で…
「俺の世界の鍵、落ちてないかと思ってな」
「世界の鍵？なんだそれ」
烈火はしまった、という顔をしていたが、諦めたようで、その話を始めた
「…あ～、簡単に言えば、この町から離れるためのアイテムかな」
「…この町からか」
「俺も長居できる人間じゃないからな。ここの家族じゃないんだし…」
「何言ってるんだ？ハルナとかはもうお前の事を家族だって認めてるぞ？」
「…ハルナがねぇ」
烈火が何やら考え始めた。そしておもむろに口を開く
「すまないが、もう少しの間相川の家に居候したい、駄目か？」
「…え？」
意外だった。先程の様な状況ならすぐに出ていくと言い出すかと思ってたからだ。…どういう風の吹きまわしだ？
「この町には、俺が住んでた場所の様に、俺の事を偏見や差別の目で見ない…もう少し、こっちにいてもいいか、って思ってな。それに…」

「それに？」
次の言葉に少し詰まらせながらも、烈火は答える
「…か、家族って言われたら、簡単に出ては行けねぇだろ？特にハルナはそういうの、聞き分け悪そうだしな」
「…まぁな。でも、こっちに住むなら歓迎する。これからまたよろしくな、烈火」
俺はそのまま握手を烈火に求める。烈火もそれにすぐ応じてくれた。
…こいつ、結構いいやつだよな
「…さて、そうと決まれば、今日の晩飯を作るか！」
「あ、それは俺がやるから…」
「馬鹿言え、こーいう時にご機嫌を取る最善策はうまい飯を食うことだろ？だったら今やらなきゃいけないのは俺だろ！」
「なんだよその理屈…。いいか、今日は来客分もあるから、俺がやる」
「一人増えようが変わらねぇよ！」
何故か言い争いをしてる俺と烈火。そこにハルナがやって来た
「アユム、もう夕飯の支度終わったから早く来いよな」
「ハルナ、夕飯作っちゃったのか！？」
「う、うん…どうかしたのかアユム？」
「い、いや…もしかしてセラも…」
「葉っぱの人とちゃんと教えたながら作ったから安心しろよな！」
「そ、そうか…」
最近ご飯時になるとセラが台所に行きたがる。ただセラの料理の腕はゾンビを殺すレベルだ。毎回必死に食い止めてたが、今日は俺が居なかったから、危なかったな…
「相川。セラフィムは料理が苦手なのか？」
「苦手の域はゆうに越えてるさ。それなのにセラ自身は料理が好きだから困ったもんでな」
「だったら今度、親睦がてら知人の皆でパーティーでも開かないか？その時に料理を俺がセラに教えてやるさ」

烈火がこんな提案をしてくるとは思わなかった。…そんなに冷たい人間じゃないのかもな

「アユムもルナも立ち話すんなよな！早く来いよな！」

「はいはい、分かったよ」

ハルナに手を引かれ、居間へ向かう俺。相川家は、今日も賑やかで、平和です

～おう！料理は嫁の第一歩！～

どうも、相川歩です。今日は生憎の雨模様、だけど俺にとっては楽な日ッス。…あ、俺ゾンビっす。そして…魔装少女っす

烈火が住み着いて一週間、これと行って変わった事は起こらなかった。いつも通り死ぬ気で登校、昼にはトモノリ達と飯、そして帰ってきて家事…変わらぬ日常が訪れていた

「じゃ、行ってくる」

「あぁ。…そうだ、今日は俺、今日ハルナと出掛けるからな」

唐突に出た、びっくり発言に俺は驚かされる。…まさか、ハルナの奴…

「それ、ハルナが誘ってきたのか？」

「いや、俺が持ちかけたんだ。この町のこと、ゆっくり探索してみたいもんだって言ったら、やる気になっちまってな」

「えぇ～…」

いきなりこんなんで、また面倒な事になるんじゃないか、そう不安を感じざるを得ない二人だ

「とりあえず、晩飯までには帰ってくる筈だ」

「あ、あぁ…とにかく、はめを外さないよう頼むな？」

「心配ないと思うが…まぁ分かった」

俺は不安を感じつつ、学校へ向かった…

「やっと終わった…。今日は授業が無駄に長く感じたな～…」

昼前の授業が終わり、昼食の時間。俺はいつも通り自分の机で弁当を広げる。最近はハルナも分かって来たのかバランスの取れた弁当に仕上がっていた

「相川ぁっ！昼飯食おうぜーっ！」

「あーいっかわっ！来たぜっ！」

「…わ、私も一緒に…いい…？」
「妙ちゃん、もっと積極的に行かなきゃ！」
そこにいつものようにトモノリ、平松、三原、織戸がやってきた。
昼になるとこうして集まってご飯を食べるのが日常になっていた
「それにしてもさー、相川ん所って金やばくないのか？あれだけ人数居るのに、食費とかやばいだろ？」
ツンツン頭の織戸がこんな事を口にする。それを言われれば確かにそうなんだが…
「それが、意外となんとかなるんだよ。俺も不思議なんだがな…」
実際問題、生活をするのにお金に困ったことは無いのだ。仕送りがあるのもそうだが、何故か事足りてしまって居るのだ。…あいつら、俺が居ない間ってなにしてんだろうな
「…相川君って…ちゃんと管理できてるんだ…すごいな…」
平松が控えめに微笑んでくれる。それに続きトモノリも
「そりゃ、オレの嫁だからなっ！」
と、意味分からなく胸を張っていた。…嫁じゃないだろ
「そうだ、相川？最近師匠がなんかパーティーを開きたいって話聞いたか？」
すると突然トモノリが俺にそんな事を切り出した。実は先日烈火がその様な事を言ってた気がする。烈火はハルナに相談したのか？
「いや、俺は聞いてない。トモノリは何か内容聞いたのか？」
「全く。師匠もやりたいってだけでまだ何も決まってなかったみたいだ。でもいーなー。パーティーやってみたいなー！」
トモノリがにこにこしながら話している。こういうときの友紀は可愛いんだよなぁ…
「まぁハルナの事だ。急に明日やることになっても不思議じゃないな」
そして放課後、家に帰ると…
「ただいまー」

『おかえり』
「おかえりだぞ、アユムっ！」
茶の間にユーとハルナが居た。…烈火とセラが居ないみたいだな。
どうしたんだ？
「ハルナ、セラと烈火は？」
「あぁ、二人ならキッチンだ！」
その瞬間、俺の思考回路が一瞬だけ高速で動いた！
…セラが、キッチンだと！？何故止めなかったハルナ！つか、ユーも止めろよ！というより何平気で二人座ってんの！？
「そ、そか…って、烈火もか？」
「うん。なんかルナが葉っぱの人に料理を教えたいって言うから、二人は待っててくれって言われた！」
…あぁ、これも言ってたな。烈火がセラに料理を教えたいって。それが今日なのか
「そうか、少し様子を見に行くかな」
そして俺がキッチンへ向かうと…
「…そうだ、セラフィム。お前筋はいいんだ。だから勘違いさえしなければお前の刃は人を幸せに出来る」
「そ、そうなのか。…やった…」
烈火とセラが楽しそうに料理を作っていた。具材を見る限り、多分肉じゃがだろう。…それにしても烈火って、あまり人見知りしないんだな。セラもあんなに楽しそうな顔を見せるなんて…
「それにセラフィム。お前には大事な人が居るんだろ？」
「？いきなり何を…」
「その内分かるさ。なぁ…相川」
「…は？」
いきなり声をかけられて、俺は腑抜けた声を出してしまった。…そういえば、あいつは随分そういうの鋭いんだよな
「歩、帰ってきてたのですか、汚らわしい」
「え～…帰宅していきなりそれっすか？」

「仕方が無いでしょう。貴方は気持ち悪いんです」
「え～…」
「まぁ、セラフィム。料理を早く完成させよう。ハルナやユークリウッドも待ってる」
「あ…そうですね」
「とりあえず、後は…」
烈火に促され、セラはまた背を向ける。…今日のご飯は大丈夫そうだな

そして夕飯。烈火とセラが持ってきた器にはやはり肉じゃがが入っていた。それをセラが一人一人に手渡す
「今日の料理は自信作です。遊び心としてお肉は挽き肉を練って肉団子にしたんです。だからコロコロ肉団子と名付けましょう」
セラが笑みを浮かべながら話す。セラが言う通り、肉が肉団子だった。…なかなかおもしろいな。具材が全部同じ形だからな
「さぁ、皆さん召し上がってください」
「いっただっきまーすっ！」
『いただきます』
そうしてハルナとユーがいち早く肉じゃがを口に運ぶ。するとユーがメモを取りだし、セラに
『ぐっじょぶ』
と書いて見せた。ハルナも
「うまいぞ葉っぱの人！アタシこんなうまい肉じゃが初めて食べた！」
と、絶賛していた。俺も一口、口に運ぶ
「…おぉ、しっかり火も通ってるし…セラ、やれば出来るじゃないか！」
「あ、ありがとう…」
皆に誉められ、喜ぶセラ。だが、烈火が来ない
「…あれ、セラ。烈火は？」

「烈火ですか？まだキッチンに居るのでは？」
「分かった」
とりあえず俺は立ち上がり、キッチンに向かう。だがそこには誰も居ない
「…どこに行った？」
そして洗面所を見ると、そこに烈火が座り込んでいた。心なしか、顔色が悪い
「…どうしたんだ？」
「相川か…ちょっと、悪い風に当たったみたいでな」
「悪い…風？」
「いや、あくまで俺にとってだがな？まだこっちの世界の環境に慣れていない俺にとっては、慣れるまで常に気を張ってなきゃ行けない。今は気を張りすぎた代償が来てるってだけさ」
「かなり具合悪いのか？」
「…大したことはないさ。だが、今日は飯を食わない事を許せ」
「まぁ、それは別にいいけどさ…、つらかったら言えよ？」
この言葉に、烈火は少し口元をつり上げ
「あぁ」
と、呟いた。…少しは進展してきたな、俺たちの仲。そして俺がその場を去ろうとすると
「あぁ、ちょい待て」
「ん？まだ何かあるのか？」

「あの料理、実は俺はあまり手を出してない」
「え！？」
驚愕のセリフだった。セラはハルナをもってしてもとんでもない料理を作り出していたのだ。なのにどうやって…
「ま、次回もうまくいく保証は無いが…セラフィムも一生懸命だ。あまり冷たくあしらうなよ？」
「別に冷たくしてるつもりは無いさ。ただセラの料理はゾンビの俺

でさえ死にかける料理だから、嫌でも止めなきゃならないんだよ」
「…やっぱりそんなに酷いのか？」
顔色が悪い烈火の顔色がさらに悪くなったように見えた。…まさか、作ってる最中に味見して、それで体調を崩したのか？
そんなこんなで夕食も終わり、食器を片付けていると
「アユム！！明日暇か！？」
「…なんだハルナ、いきなり」
ハルナが駆け寄ってきた。何を聞きたいんだか…
「…ん～…とりあえずは明日は土曜日だから学校は無い。基本は暇かな？」
「だったら明日、パーティーやるぞ！ハルナちゃんプレゼンツ、パーティーフェスティボーだ！」
またハルナがよく分からない企画を…って待て、そういえば昼、トモノリが…
「師匠が、パーティーやりたいって」
…このことか！？
「だからアユム！友達呼んでこいよな！一人でも多く！」
「いいけど…何するんだ？」
「よくぞ聞いたな、アユム！」
ハルナは腕を組み、ふんぞり返りながら話を続ける
「ずばり、料理対決だ！！」
「…は？」
「今回のフェスティボーは料理対決だ！優勝者はアユムとの1日デート券だ！」
「…あの、ハルナさん？」
「今回はいつもダメながらに頑張ってるダメムの為にやってやるんだからな！感謝しろ！」
「ちょ、ちょいまてハルナ。…それはパーティーなのか？」
それはパーティじゃなく、コンテストなのだ。だがハルナはお構い無しと言った様子だ

「別にいーんじゃないの？ハルナちゃんは細かい話は面倒だから嫌いだ！」
「いやいや…」
「とにかく、あしたやるかんな！」
そういい、ハルナは足早に居間に戻って行った。…明日か、急すぎるなぁ…、人集まらないんじゃないか？

だが、俺の心配は意味無しだった。周りに声をかけたら、平松、トモノリ、サラス、ハルナ、ユー、セラ、ネネさん、さらにはクリスまで（ちなみに、常に酒持参。でなきゃおっさんになっちまうからな）来た。食べる側には俺に、烈火、下村の三人が集まった。織戸も呼ぼうと思ったんだが、ハルナに
「なんか天のお告げで、ツンツン頭は表現しにくいから呼ぶなって！」
だそうで呼ばなかった。すまん、織戸
だが正直な話、俺とのデート券なんて欲しがるのか？まぁ、トモノリは
「おっしゃー！燃えてきたぁ！」
とか叫んでる。あいつは勝負事好きだからなぁ。サラスも
「ダメダーリンの為にたまには一肌脱ごうではないか」
とか、あの平松も
「…わ、私も…頑張ろうかな…」
なんて…。俺、意外とモテてたりする！？
「歩、今の顔は地球の海と陸の比率が逆転するくらい気持ち悪いです」
…セラの一言で目が覚めた。そんなに気持ち悪かったかなぁ
「じゃー、皆準備はいいかぁ！！」
ハルナの掛け声が入る。どうやら始まるらしい
「制限時間は一時間だ！その間に買い物と調理をするんだ！わかったかぁ！」

ハルナが叫んでる。…楽しそうだな

「じゃ、ハルナちゃんプレゼンツ、パーティーフェスティボー…開始いっ！！！」

～ふん、それでこそ私のダーリンだ～

「じゃ、ハルナちゃんプレゼンツ、パーティーフェスティボー…開始だぁっ！！」
ハルナの掛け声でパーティーと言う名の料理対決が始まった。ルールはシンプルで、一時間の間に買い出し、調理を済ませ、その後審査員の俺、烈火、アンダーソン（下村）君の三人が試食して順位をつけ、一位が俺、相川歩との1日デート券を勝ち取るって寸法だ。…デート券を景品にしてやる気を出してる奴は居ないんだろうけど
「…なぁ、相川。俺と…下村だったか？俺ら二人の必要性ってあるのか？」
「彼の言う通りだよ、相川君。僕らが居たところで、対した事は出来ないんじゃないかい？」
烈火とアンダーソン君が愚痴ってる。…今回は完全にやることなさそうだもんなぁ
「仕方ないだろ、男も呼べってハルナに言われたんだから」
「まぁ、仕方ないのは分かるんだが…」
「あまりにも手持ち無沙汰でね…」
二人が苦笑いを溢す。…諦めてくれ
スタートした直後、俺の元に二人駆け込んできた。トモノリと平松だ。どうやら俺の好みを聞きに来たらしい
「なぁなぁ相川！！そういや相川の好きな食べ物ってなんだ！？」
「そうだな…結構豚キムチを作ってる事が多いから、豚キムチかな？」
「豚キムチかぁ！？オレ、作り方分からないぞ！妙子～どうしよ～」
「…多分…私、作れるから…教えようか、ユキちゃん？」
泣きつくトモノリに笑顔で答える平松。まるで神と信者だ。だけど平松よ。それじゃお前は勝てないんだぞ？
二人が去り、少しずつ作られた台所（ハルナか手配したらしい。な

んつう人脈…）で作業をする人が現れ始めた。始めに来たのはクリスだ。手にもってるイカを…網で焼きだした？
「にゃは～、やっぱりおつまみはおいしいんだよね～♪」
コンテストに関係の無い物を作り出したぁっ！？それは自分の酒のおつまみだろっ！！
「うへへ～、おいしぃ～♪」
一人で昼間っからお酒を楽しんでる…。こいつも、脱落かな
次に来たのは…あれは、サラスか？随分大量に具材を買ったんだな…買い物袋がパンパンだ
「ふん…愛すべきクソダーリンの為に、鍋を作ろうか」
そういい、鍋を取り出した。そして具材を切り出す。なるほど…鍋なら調理にはさほど手間はかからないな。だけど、それにしても袋が…
「…こんなに具材を入れては、何がなんだか分からなくなってしまうのではないか？」
一人で突っ込んだぁ！？買い物してる時点で気付けよ！！
「まぁいい。入るものだけぶちこんでしまおう。後は私の愛を入れておけば、ダーリンは間違いなく食べてくれるだろうからな」
愛は関係ないよ！？それにそんな作り方に愛は無いよ！？
次は…ネネさんか。この人は一人暮らしだし、料理に関しては問題ないんじゃないか…？
「よしっ！材料も買ったし、時にはヒロイン候補って所、見せとかなきゃね！」
…なんかよく分からないことを言ってた気がするけど、まぁいいか。ネネさんの持ってる具材なら…ミートスパゲッティかな？
「ぐ～」
寝るなぁぁぁぁっ！！？スパゲッティゆでながら寝るなぁぁぁ！！
そして次は…危険人物、セラか。…正直このイベントにだけは参加させたく無かったんだが…
「私の料理で、皆さんをきっと笑顔にして見せます！」

とかなんとか…すごい意気込んでたから、止められなかったんだよなぁ
「ふむ…皆さんが喜ぶ味とは何でしょうか…」
セラは台所に食材を並べ、何やら悩んでいた。…今回のイベントでは俺たち三人は手伝うなってお達しだからなぁ…。でも、随分困ってるなぁ…
「ええと…烈火の指示通りに…これを…こ、こうきって…あ、あれ？」
随分手元がおぼつかないセラ。…少し声をかけてやるか
「セラ？」
「…歩ですか？」
セラが手を止め、こちらに振り向く。いつもの様に毒を吐いてくる様子はない
「随分手間取ってる様だが…何を作るんだ？」
「ふふ…歩に教えては、楽しみが無くなるでしょう？」
とセラは言い、いたずらな笑みを浮かべている。…随分楽しそうだ。本当に料理が好きで、刃で人を幸せにしたいんだな…
「とりあえずセラ。怪我だけはするなよ？なんか手元があぶなっかしいからな？」
「歩に言われなくても気を付けますよ？」
そういい、作業に戻るセラ。…多分、大丈夫だな？
「相川」
そこで、烈火が俺を呼んだ。とりあえず戻るか
「どうした烈火？」
「悪い、少し席を外す」
「…どうかしたのか？」
自然と小声になる二人。アンダーソン君も話を聞いてるみたいだけど、まぁ気にしない
「ちょっと、俺の世界と同じ気配が感じ取れた。戻る手がかりが掴めるかも知れない」

「そっか…行ってこい、烈火」
「すまんな。ハルナには謝っといてくれ」
そういい、烈火がその場から居なくなる。そこでアンダーソン君が
「相川君。彼はやはり異界人かい？」
と聞いてきた。…ん？
「下村君、お前…あいつが何者か分かるのか？」
アンダーソン君は今「やはり」って言葉を使った。だとすると彼は烈火の存在を知っていると言うことになる。彼は笑顔を作りながら答える
「あぁ。おおまかにはね」
「教えてくれないか。烈火は何者なんだ？」
「彼はね…」
「アユムーっ！！」
二人で話してる中、唐突にハルナに呼ばれ話が途切れた。…聞きそびれたな
「どうしたハルナ？」
「ルナが見当たらないんだけど、どこ行ったか知らないか？」
…あ、まだハルナに伝えてなかったな
「烈火なら今用事があるって言ってちょっと出掛けるって。ハルナにごめんってさ」
「ふ～ん…」
ハルナが寂しそうな表情を見せる。…やはり彼はヴィリエの…？
「しゃーなしだな！アイツ追うぞ！」
「…え？」
ハルナが意外な一言を言った。まさか…このイベントを放置する気か？
「男は三人必要なんだ。だからルナもいなきゃダメなんだかんな！！」
「…そ～だな」
「じゃ、皆！アタシ達、ちょっとルナを探しに行ってくるかんな！」

「は～い」「分かりました」「ぐ～」
ハルナの言葉に皆が反応する。…ネネさん、まだ寝てるのか
そしてハルナがルナを追いに公園を飛び出していった。…俺はハルナを追う前に、ユーに近づく。そういえばこのイベントでユーは参加せず、観戦者だった。…ユー、何を思ってるんだろうな
「ユー、ちょっと行ってくるな」
『歩、気を付けて』
無表情ながらにこのメモを見せるユー。…気を付けて？
「どういう事だ、ユー？」
『彼の命が、危機』
「なんだって…？」
『災厄が来る。彼の世界から』
ユーが言うことだ、用心するに越したことは無さそうだな
「アユムーっ！早くしろよなーっ！！」
「あぁ！！…じゃ、行ってくる」
『行ってらっしゃい』
ハルナに呼ばれ、公園を後にする俺。そしてルナ探索が始まった…

「しっかしアユム、ルナがどこ行ったか聞かなかったのか！？」
「それがあいつ出掛けるときには行き先を毎回言わないんだよなぁ…」
「アイツはバカなのか？」
単純に物を言いすぎだろ
「違うだろ。烈火なりの考え方が謎めいてるだけだ」
「要するにバカなんだな？」
…もうそれでいいや
「とりあえず、烈火の居る世界に戻る鍵を見つけそうな場所を…」
「…ルナの世界の鍵？どーいうことだアユム！アタシはそんな事知らないぞ！」
ハルナがそんな事を口にした。烈火はもしかして…ハルナに自分の

事を言ってないのか？
「なぁアユム！どういう事だって聞いてるんだ！」
「あ～、それはな…」
ちょっと待て、これは俺が話して良いことなのか！？…あいつがわざとにハルナに喋らなかったとなると、俺が話すのはいかがなものか。烈火の意図が読めない以上、ここで話すのは烈火のプライバシーにかかわるのではないのだろうか？でもハルナは
「教えなかったら口聞いてやんないかんなっ！」
といいグズる。…こうなったらハルナは理由を聞くまで絶対に引き下がらない。さて、どうごまかそうか…
「あのなハルナ？人には誰しも知る必要のない現実というものがあるんだ。それを聞いて損したーって思うなら、聞かずにいたほうが幸せだってこともあるだろう？」
「むー」
しまった。こんなこと言ったってハルナが聞くはずがない。…詰んだか
だが俺の杞憂も、近くにあった建物の爆発によって吹き飛ばされた。建物が黒い煙を上げながらも燃えている
「…なんなんだよ」
ついもらす愚痴。俺、ゾンビになってから退屈しない生活になったなあ！ハルナはその光景に驚きを隠せない
「…ハルナ、メガロか！？」
「んや、気配は感じない。でも…じゃなかったらなんなんだろうな？」
あほ毛が？の形になるハルナ。…メガロじゃないってことは、何がこの状況を作り出した？京子は…今は大先生の監視を受けているはずだ。…脱走などできるはずがない。闇の王も除外。先日、彼はユーによって確実な死を迎えたはずだ。生き返っているとは到底思えない。クリスもやりかねないところがあるが、あいつは今イベントに参加中、そんなことができるはずがない…

そこで俺は、さっきユーに見せられたメモを思い出した
『彼の命に危機』『彼の世界から災厄が来る』
…俺の全く知らない、異世界からの侵略者…か？
「…こりゃ、早く烈火を探さなきゃヤバそうだな」
「アユム、それって…」
ハルナが言葉を言い終える前に、俺の頬を弾丸が掠めていった。その方向を振り返れば、ロボットが銃を構え、こちらを向いていたのだ。…今の日本にこの技術はない。だとするとヴィリエの技術か、冥界か、異世界か…できれば異世界以外であってほしいんだが…
「…前方の人間、われらが追いし炎ではない。…無視の方向で」
ロボットは、炎とやらを追いかけているようだ。彼らに俺たちを攻撃する意思はうかがえない。銃もしまったってことは、敵じゃないようだな。だけど、それに火をつけるのが、一人
「炎…ルナのことかっ！」
ハルナだ。この状況でハルナなら間違いなく食って掛かる。想像通り炎とは烈火のことだろう。だが今ここで目をつけられたら…
「…貴様らも、炎の味方か。なら貴様らも抹殺する。それが我が主の指令」
そう言いロボがまたも銃口を俺たちに向ける
「…！？」
ハルナは今丸腰だ。銃弾を防ぐ術はない。…くそっ！
「…抹殺」
「ハルナっ！！」
俺は咄嗟にハルナの前に立つ。あいにく俺はゾンビだ。その攻撃ごときで…
「っぐっ！？」
ロボが放った銃弾は俺の脇腹をかすめる。…ちくしょう、ゾンビだが、やっぱいてぇ…
「あ、アユムっ！？」
ハルナが心配して声をかけてくる

「大丈夫だ。…ったく、見境なく喧嘩を吹っ掛けるな」
「でもあいつら、ルナを…」
「あぁ、家族に手を出しやがる連中には…容赦は要らねぇ！」
そして俺は機械兵に飛び込み拳を叩き込む。相手は思ったよりもろく、簡単に破壊できた
「…この程度、なのか？」
だが安堵も束の間、前から大量の機械兵が押し寄せているのが見えた。…あの数じゃ、いくらなんでもヤバイか。ミストルティンは持ってきてないし、近くには丸腰のハルナも居る。…逃げるか？でも今逃げ出せば、烈火はどうなる？多分さっき起きた建物の爆発に多分関与してるはずだ。だとすると無事ではないはず。なら今機械兵が俺たちを見失えば、また標的は手負いの烈火に…
「あぁもうっ！！どうすりゃいいんだよぉっ！？」
だが、答えを出してくれる頼れる少女が、今は付いていた
「バユムっ！！私がミストルティン持ってくるまで耐えろよな！！絶対ルナを…ダチを救うんだかんな！！」
「…ハルナ…あぁ、そうだ！！」
そうだ、ハルナのいう通りだ。例え付き合いが短くても、友達であり、家族なんだ。…見捨てられるわけない
その思いは、俺だけじゃなかったらしい
「相川っ！！来たぜっっ！！師匠のダチを救うの手伝うぜっ！！」
「私も興味あるな～、その烈火って子。ヘルサイズが目を置いてるんだから、さぞかし変な奴なんだろうけど♪」
「ふん、それでこそマイダーリンだ。私も手伝おう」
「歩、ハルナは任せてください。確実に守り抜きます」
「皆…！！」
この事態を聞き付け、友紀、ネネさん、サラス、セラが来てくれた。
そして一番後ろには…
『私も戦う』
「…ユーも来てくれたか。無茶はするなよ？」

『今一番無茶してるのは烈火』
「…ははっ、ごもっともだな」
ユーも来てくれた。これで戦力は十分だ！
「じゃあセラ！ハルナを頼んだ！他の皆は烈火を探すのを手伝ってくれ！」
「了解！」
そして、俺たち対異世界文明の戦いがきって落とされる…！

「…ちっ、機械兵か…ったく、さっきの意味不な攻撃で少し深手を負っちまったかな…少し…視界がボヤけやがる」
「…」
「…だけど、何としても逃げ切る。それが…俺の使命…」
「滅せよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2581z/

これはぞんびですか？～はい、二次創作です～

2012年1月14日08時48分発行